

88. 野洲郡中主町虫生出土の 銭壺について

1

はじめに

昭和44年6月11日、自宅の改築にあっていた白井信雄氏は、地下1.5m下の地中から1個の信楽壺を掘り出したが、なんとそのなかには総数3,900枚をこえる銅銭がぎっしりと詰まっていたのである。このような大量の銅銭の発見はきわめてまれであり、その資料は貴重である。ここに当時の関係者においてその出土地と銅銭、銭壺の紹介を行い、今後の研究に裨益するところあらんと願うものである。

2

位置

野洲郡中主町虫生は、野洲川の右岸にあって、日野川との両河川に挟まれた沖積平野の真唯中に形成された一農村である。村の東は野洲町境をなす家棟川の自然堤防が大きな天井川をつくり空間的な障壁をなすが、西側はよく開け、木部の錦織寺の屋根が一きわ大きく見える。

野洲町側、すなわち朝鮮人街道、あるいは中山道からこの村に至るには、大字永原、江部で知られる「永原御殿」の北側を抜けて、古代条里のままの景観を残す里道を西進し、家棟川を越えたと最初の村である。また、浜街道からは幸津川を北進し、小浜に至る直前の里道を真直に東進すると、野洲川を越え、堤、西河原を経て木部に至るが、次の村が虫生である。

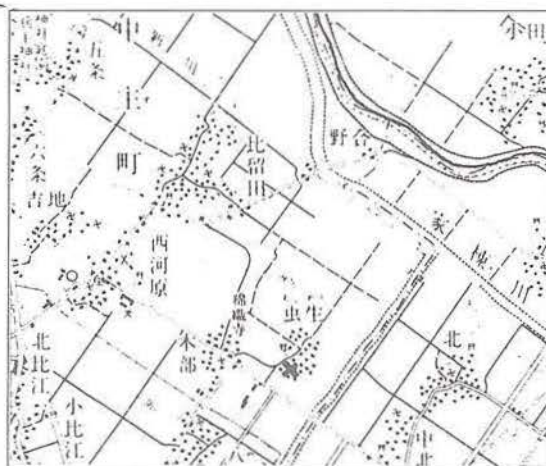
この虫生の村には虫生神社が祭られ、また、神社の境内にある会議所には当社の神宮寺に伝えられていたといわれる源信作の墨書銘をもつ地藏尊座像が安置されている。

村名となった虫生は一般的に蚤のことで、ひいては織物関係の工人の存在が予想されるが、隣接する木部の錦織寺の錦織工もまた関連性を暗示させるものといえよう。

このように虫生の村落は人々の記憶にとどめぬ昔から営まれ、今日に至っているとみてよからう。

3

発見の経緯と状況



1/50,000

発見の場所ははじめにも触れたように、虫生に住む白井信雄氏宅の床下であり、改築の折に発見された。その位置は、虫生の集落のほぼ中心部にあたり、虫生神社から南へ100m強の所である。

白井氏の掘削工事にともなう観察によると、深さ90cmの個所で旧屋敷跡が発見され、そのうえは客土によって地盤が固められていた。そして地表下1.50m、旧屋敷跡の面からではおよそ60cmの深所で壺は正位置の立ったままで発見をみた。壺には蓋に該当するものはなく、すでに泥土が内部にまで入りこんでいたが、木蓋か何か蓋として用いられていたと考えられる。

その出土位置を旧農家の配置から考えると牛小屋のそばにあたるのとことであるが、旧屋敷の構造については、調査がなされていないため、その規模、配置などにわかに知りがない。

いずれにせよ、工事中の所見では数百年間のあいだに、家の基礎工事が二回あったことが地層から明らかにされており、この土地に代々家が構えられていたことを推定させる。

4

出土銭

銭を信楽壺に納めてはいるが、土中に埋められていたうえ、蓋を欠いていたため、方孔に紐を通したままの状態ですべて密着し一塊になってしまっていた。このために破損品や文字の明らかでない粗悪なものが多く、銭の種類も十分には調べかねる状態であった。けれど

も、かつて愛知郡稲枝神社境内や八日市市延命寺公園西麓で発見された以外に、このように県内で多量の銭がまとまって一枚も失われることなく出土した例は稀であるので以下若干所見をのべてみよう。

発掘された埋蔵銭を調べると、通貨の年代、及び価値、流通範囲がある程度明らかになるであろうが、確定したものとして今、言及できない。このためここでは銭の内容についてのべてみよう。

銭の大部分は中国銭である。その中に青森県から九州の諸県にわたって発見された出土銭の中で、数少ない銭といわれて稀少価値をもつ崇寧通宝(1102年)が混じっているのがせいぜいをはなっている。それに加えて興味をひくのは、咸淳元宝(1265年)など、南宋後期の銭がしばしば混じっていたり、元代の至大通宝(1310年)が一個混じっていることである。唐、北宋、明銭の多さに比べて南宋銭が著しく少ないことは、南宋との交流が著しく、日本への輸入銭貨の量が増大したにもかかわらず、その鋳銭量が中国歴代のなかでもかなり少なかったことの反映といえる。

他方、元代では貨幣の鋳銭があるにはあったが、鋳造しても殆ど取り扱いを禁じてしまう状態であった。というのは、主に紙幣を通貨にして価値をもたせていたからである。

もう一つ重要なことは、中世前期(鎌倉時代)の通貨の種類と比較して、この虫生の銭には、明銭である

洪武通宝(1368年)がきわめて少なく、同じく永楽通宝(1403年)が比較的少ないことである。なぜ、中世の貨幣流通の目安ともいえるべき明銭が少ないのかについては将来の研究をまちたい。

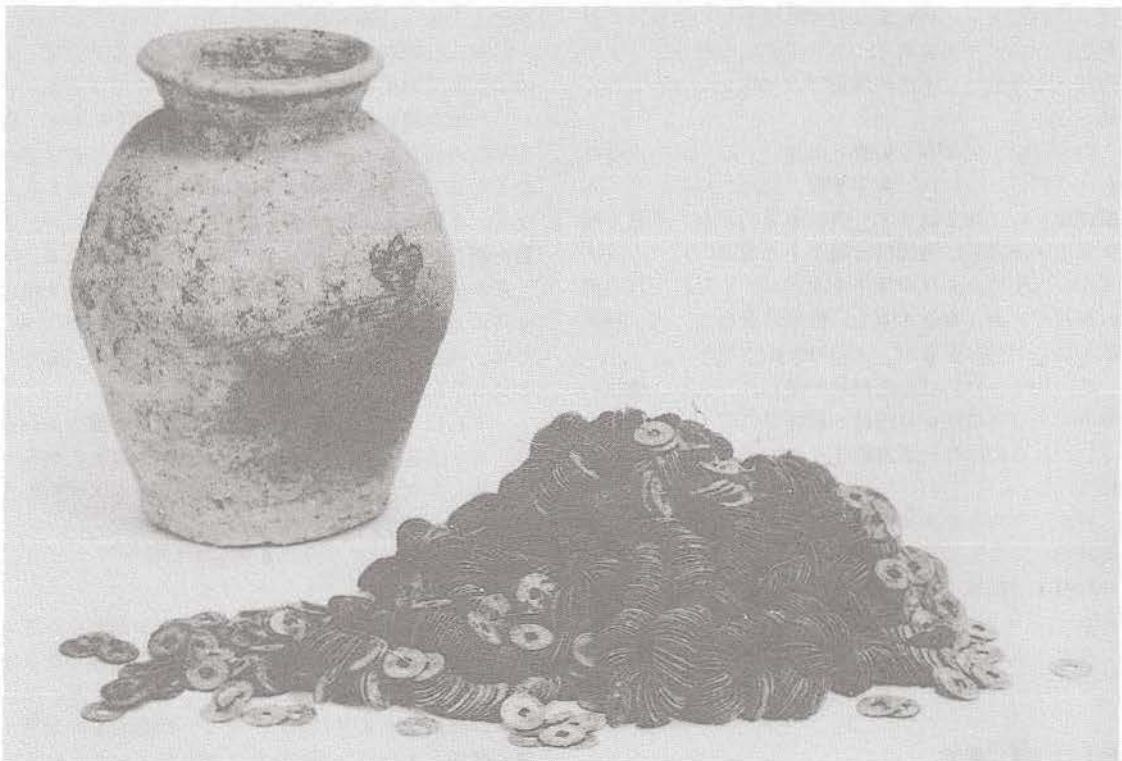
ただ、ここでいえることは、この埋蔵銭の全国的な様相からすると、「中世前期に北宋銭が約88パーセント、同後期に67パーセント余を占め、近世初期まで北宋銭が通用銭の主体をなし」(小葉淳著「日本の貨幣」)ていたと、のべられているように、明銭の混じっている数が少ないのも、北宋銭の貨幣流通における価値が低落せず、その通用された時期が非常に長かったことを無言のうちに示しているのではないかとおもう。

銭貨の内容はこれぐらいにして、次に眼を銭の内訳にむけることにしよう。

総数3934個のうち破損品や文字の明らかでないものを除く計3807個、その主なる内訳は次の通りである。

唐	—	275	北宋	—	2514	南宋	—	55
元	—	1	明	—	142			

その他に朝鮮の朝鮮通宝一個が混じっていれば、また日本の寛永通宝一個などの文字の識別できる銭もふくまれているという具合である。このように宋以降の各種の銭は、ほとんど網羅しているといってよい。そして、江戸時代前期までの銭種を中心として、江戸時代初期に鋳造された寛永通宝1枚を含むところから、この時期以降に埋蔵されたと推定することができる。



さらに、個数の多い銭をあげると次のようになる。

元豊通宝 — 552	皇宋通宝 — 481
熙寧元宝 — 385	元祐通宝 — 359
開元通宝 — 269	紹聖元宝 — 202
天聖元宝 — 193	聖宋元宝 — 156
永樂通宝 — 127	政和通宝 — 119
天禧通宝 — 99	景德元宝 — 91

以上の銭が銭貨として日本全国で広く取り扱われてきたことがこの埋蔵銭によって判明するであろう。

いずれにせよ、奈良時代の初めに制度として実施を見た日本の貨幣が、12世紀頃に原料である銅、鉛の産額が減るにおよんで鑄造を停めてしまったことから中国銭とのつきあいが増えたのである。中国銭との接触がふかまるにつれて中国銭の利用価値が高くなっていった。こうして積み重なった中国銭の輸入は、室町時代の後期(16世紀)までまことに莫大な数量を日本にもたらしたことであろう。けれども、莫大な量数の輸入のわりには、その実態ははっきりしたものではない。

じっさい発掘調査された中国銭はそんなに多くはない。全国的に発見された報告などから考えてみて、中国銭のひろがりをはるかに超えることは困難である。

今なお、中国銭の多くは我々が生活している家や集落に近い畑地、雑木林、または館址、城址などに埋まっているに違いない。その中であって、中主町虫生でこうした一括した状態で壺に納められ多量の銭が出土してきたことは、やはり重要な資料ということができ

開元通宝 — 269	乾元重宝 — 6
周通元宝 — 1	唐国通宝 — 2
宋通元宝 — 13	太平通宝 — 34
淳化元宝 — 36	至道元宝 — 80
咸平元宝 — 66	景德元宝 — 91
祥符元宝 — 29	祥符通宝 — 59
天禧通宝 — 99	天聖元宝 — 193
明道元宝 — 13	景祐元宝 — 45
皇宋通宝 — 481	至和元宝 — 45
至和通宝 — 30	嘉祐元宝 — 51
治平元宝 — 77	治平通宝 — 7
熙寧元宝 — 385	元豊通宝 — 552
元祐通宝 — 359	紹聖元宝 — 202
紹聖通宝 — 1	元符通宝 — 77
聖宋元宝 — 156	崇寧通宝 — 1
大觀通宝 — 15	政和通宝 — 119
宣和通宝 — 10	正隆元宝 — 3
淳熙元宝 — 9	紹熙元宝 — 4
紹熙通宝 — 1	慶元通宝 — 3
嘉泰通宝 — 3	嘉定通宝 — 9
太宋元宝 — 1	紹定通宝 — 7

嘉熙通宝 — 3	淳祐元宝 — 2
皇宋元宝 — 9	景定元宝 — 1
咸淳元宝 — 3	至大通宝 — 1
洪武通宝 — 13	永樂通宝 — 127
宣德通宝 — 2	
朝鮮通宝 — 1	寛永通宝 — 1

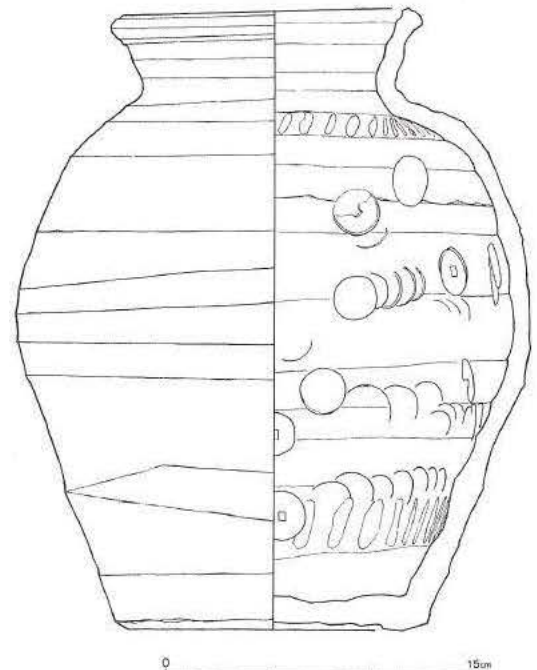
(左上が最も古く右下が最も新しい。)

5

錢壺

銭の取められていたこの壺は、器高およそ30cmを測るいわゆる信楽の錢壺と呼ばれるもので、本来は農業生産の必需品、たとえば種壺として作られたものであろう。しかし、頸のすぼまったわずかに外反する口縁は、その端部にて玉縁状に肥厚し、この貯蔵用の壺にならな器形は銭を貯えるには最適な容器であったに相違ない。ただ、甌目陶土による信楽焼が種壺として最高品であったのは、その陶土の粗さからくる通気性であり、取められた種は呼吸をすることが可能だったからである。このことは逆に、銭を貯蔵用として取めた場合、湿気の浸透によって、その錆化を促したことであろう。

なお、取められていた古銭のなかで最も新しいものとして寛永通宝が含まれていたが、錢壺は江戸時代の制作にかかるものではなく、室町時代に作られ、そのち寛永以後にこの屋敷下に埋蔵されたものであり、百年以上にわたって伝世してきたものとする事ができよう。



焼物は、その製作年代と使用期間、そして破棄と埋納年代とにおいてそれぞれ全く別の次元として位置付ける必要があるため、当遺跡の錢壺も製作は室町時代であり、使用、埋納時期は江戸時代まで及んでいると言えよう。

6

むすびにかえて

県内各地の発掘調査によって古銭の出土例は増大し

た。しかし、これだけ多種多様でかつまた多量の出土は他に例をみない。当時の関係者としてともかく報告の義務を果すことになったが、この貴重な資料を県民の前に提示された白井信雄氏にあらためて感謝の意を表したい。なお、遺物写真は寿福滋氏の手をわずらわし、調査には、これらを展示する近江風土記の丘資料館学芸員秋田裕毅氏のお世話になった。

(水野正好、丸山竜平、白石正明)

89. 高島郡新旭町針江遺跡 出土の製塩土器

1. はじめに

針江遺跡は、高島郡新旭町針江に所在し、琵琶湖岸より約1kmほど内陸部に位置する湖西最大の弥生時代の遺跡である。ここに紹介する製塩土器は、昭和54年度のは場整備事業に伴う発掘調査によって出土したもので、その意味などについて考えてみたい。

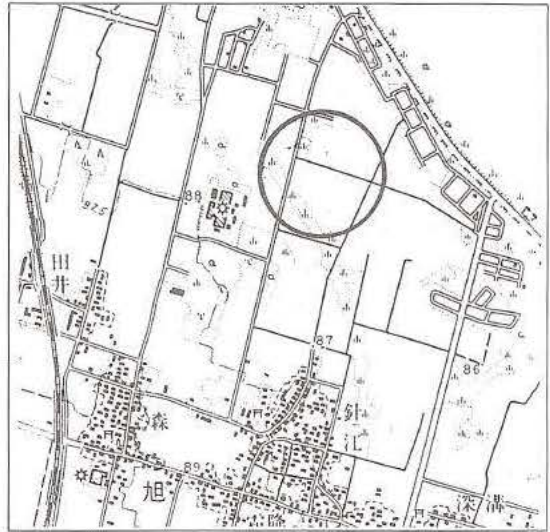
2. 製塩土器

出土した製塩土器は上半部を欠失するが、残存高4.3cm、脚台径5.4cmを測り、体部は5mmほどの薄い器壁に仕上げている。形態は、端部にやや丸味をもった脚台と、外上方にのびる体部からなり、体部外面に刷毛目調整を施すほかは、全てナデによって仕上げている。色調は、灰褐色を呈する。なお、土器にニガリの付着や二次焼成をうけたあととはみられなかった。

この製塩土器の年代については、数型式の土器が包含層中に入り混じった状態で出土しており時間幅が認められるが、その上限を弥生時代後期(上小阪期、県下においては、野洲郡野洲町久野部遺跡例とはほぼ同時期かやや後出的)、下限を古墳時代初頭(上田町1式)の間に求めることができる。

3. 小 結

昭和54年度の調査は、水路部分のみの発掘であったが、コンテナ80箱以上を数える多量の土器の出土をみている。しかしその中で、明確に製塩土器といえるものは、わずかに本例1点のみであるが、このことはさ



遺跡位置図 1:25000

まざまな問題をなげかけている。

まずこの土器の使われ方であるが、淡水湖である琵琶湖では土器製塩は不可能であるし、土器に二次的な焼成が認められないことから土器精製にも用いられていない。針江遺跡の立地が、若狭(約40km)や敦賀(約35km)など日本海側に続く交通の要衝を占めていることから考えて、おそらく日本海側から塩の運搬時(中継地)か、あるいは他の土器とともに何らかの用途があってもたらされたとみるのが妥当であろう。

日本海側から畿内への塩の道ともいうべき近江において、本例を含めて各時代の製塩土器の出土例はわずか数例にすぎない(例えば、『滋賀文化財研究所月報1968年度』所収の、西田弘「大津市中保町遺跡」にみられる⑤の土器は、おそらく奈良時代に若狭地方で製塩に用いられた船岡式土器に相当すると考える)。製塩土器の抽出が意識的になされているかどうかは別にしても、県下各地の各時代の発掘調査報告書中から製塩土器が全く見出せないことは、総体的に土器の搬入が少ないことに原因が求められはしないだろうか。製塩土器が、海浜部からかなり離れた内陸部でも出土するという認識のもとに、今後製塩土器の存在に注意が必要である。(神谷友和)

